

東三河 祭礼弓式次第 覚書

はじめに

お祭り弓の行い方は其々の神社によって少しずつ違いがある。

儀式そのものに本来意味のある事柄が、その儀式の持つ本来の意味を伝えず、形式だけが伝わったために、長い時間の中で簡略化され、風化し消滅したことも数多くある。

また、其々の流派、流儀によっても違いがあるため、どれが正しくどれが間違っているとは一概には言えない。

この覚書は「神事におけるお祭り弓の考察」(『三河民俗』6号収録)を補完するものであり、ここでは最も基本的、原初的なお祭り弓の執り行い方を記す事にする。

儀式に於ける動作や所作を表現する適切な動詞や形容詞がないため理解しづらいと思われるがご容赦願いたい。

また、^{たいはい}体配等、表現しにくい箇所に全日本弓道連盟(以下、日弓連)との違いを併記するが、読者に分かり易いようにとの配慮からであり、他意のないことをお断りしておく。

さらに、この覚書が^{くもん}公文及び弓士が祭礼弓を主催し参加する際の指針としても役立つように記すことにする。

体配とは射を行う際の態度や姿勢、動作の様式であり、祭祀などの際に礼法に従って行射することを礼射(射礼)という。礼射の歴史は古く、射法そのものを研究する流派と礼法の面から研究する流派とに大きく分かれて発達してきた。古来「礼は小笠原、射は日置」といわれてきた。^{へきりゅう}日置流では武射系の立場から礼家に遠慮する意味から礼射のことを体配と称したと伝えられている。

公文とは元来、神社仏閣が^{かんじんまど}勧進的を主催する際に^{やばもと}矢場元となり主催するものである。勧進的とは江戸時代に神社仏閣の建立、修繕などのために寄進をつる為に開催された射会である。

現在に於いて通常お祭り弓はこの公文と呼ばれる古流弓術(^{へきりゅうせつかは}日置流雪荷派、^{へきりゅう}日置流^{いんさいは}印西派、^{やまとりゅう}大和流など)の免許継承者が矢場元となり、祭礼における射会を開催する。

日置流とは室町時代に日置弾正正次が創始した弓術の一流派で、諸国を巡り辻の勧進的などによって武士は勿論、四民のへだてなく弓術を教示したといわれる。

雪荷派(吉田六左衛門重勝を流祖とする。号・雪荷) 印西派(吉田源八郎重氏を流祖とする。号・一水軒印西)も後に日置流が分派する過程で創始されたものである。

東三河に於いて日置流は室町時代に既に伝わっていた。また、この地域には現在日置流雪荷派が最も多く残されている。

東三河に継承されている雪荷派の免許については、雪荷の高弟森形部小輔直義(天

下免許)の伝系が吉田藩の家中に伝わり、後に藩の上層農民(庄屋、名主等)にも伝えられたことが現在残された弓術系図から推定される。

基本原則

- 1、お祭り矢場では、基本的に^{ほしまと}星的が使われる。
ただし、余興としての競射においては霞的や大きな^{えまど}絵的が使われる。しかし、神事は的寸法の大小に関わらず、あくまで^{ほしまと}星的が基本である。
星的とは、的の中心部分だけが黒色に丸く塗られた的である。
霞的とは、的の中心から円周部分にかけて幾層にも白と黒で塗り分けられた的である。
絵的とは、的に様々な絵や柄を描き、的中した場所によって得点が違う。そのため偶然が得点に影響し娯楽性のある的である。
- 2、的は一箇所だけに掛け、廻り的で行射し^{はや}甲矢、^{おとや}乙矢の^{ひとて}一手を続けて射ることはない。
現代弓道では持ち的で四ツ矢又は一手で競技することが多いが、お祭り弓においては廻り的を基本としており、一本射たら次の射手と交代し、次の^{やじゆん}矢順(立順)まで射ることはない。
甲矢、乙矢とは、矢の羽は鳥の羽を使用し、鳥の羽に左右の違いがあるため、回転方向の違う矢ができる。弓に矢をつがえた際に上になる走羽が射手に裏を向けるのが甲矢、その反対を乙矢という。
また甲矢、乙矢の2本一組を^{ひとて}一手という。
矢順とは弓を射る際の順番である。
- 3、矢順が回ってきた際には自分の後に引くことになる射手(^{あとゆみ}後弓)に必ず「お支度をお願いします」と声を掛けるのがお祭り矢場での心得である。弓士が矢順を忘れ支度が出来ていないことを「弓が切れる」と云い神事において重大な粗相と考えられている。仮に「弓が切れた」場合、当事者よりも^{まえゆみ}前弓の者の責任とされる。
また、矢順の回った弓士が席をはずした等の理由から弓が切れる可能性のある場合、公文の裁量権で^{いおく}「射遅れ」とされる。
「射遅れ」とは矢順の最後の者(^{おおずみ}大済)のさらに後に引くことになることである。
- 4、矢場において一度控えのための座る場所を決めたら特別必要のない限り席を移動してはならない。
- 5、羽織、袴または胴着、袴着用のこと。昔は袴着用の矢場も在ったそうである。現在でも形だけの袴着用の矢場もあるので、その際には公文の指示に従うこと。
足袋着用。現在は門人に於いても白足袋が主流であるが本来は黒足袋である。但し免許継承者は白足袋である。
- 6、弓士の射技、射術の技量はその師匠が責任を持つものであり、矢場に於いて他の門人

の技量を云々してはならない。

7、矢場に於いては何事に付き、公文である主催者の指示に従うこと。

公文の準備するもの

- 1、御幣 5 本
- 2、金的 直径一寸八分、一度も使ったことのない的であり、祭礼用に新たに設えたもの。的の表面は金色。的の裏面は厚紙などで補強し、「祝的」の儀式の際に破れないように細工する。
裏面には鬼と記した紙片を貼ること。
- 3、本覚書に記載された的全て。
- 4、御神酒、団炉裏でもてなす馳走及び昼食。的中の褒美(前置、本置、位上、競射、等其々)
- 5、的中者を控える為の芳名録を兼ねた帳面。
- 6、矢代枕、下に敷く菰
祝的 (収的)とは、神社の本殿において神官の御祓いの後の金的の矢を抜く儀式のことである。

式次第の概略

神事が行われる祭礼の1日を経時的に記すことにする。

下記の時刻はおおよその目安であり、参加者の人数等により変動する。

午前9時

『矢代受』

矢代受とは、弓士がお祭り弓に参加するために矢代矢(御矢代)を公文に受付のために提出する儀式である。

『公文の挨拶』

参加する弓士が揃ったところで、公文による弓士への挨拶、その日の行事進行の説明。

『平置』

的の寸法 八寸の星的を一手射る

書出し大前(公文に矢代矢を提出した矢順)より矢通しを兼ね甲矢、乙矢の一手を射る

『前置』

的の寸法 五寸八分の星的を一手射る

位上の、的の寸法 五寸八分～八寸の星的を甲矢射る

午前10時

『本置』

金的 的寸法 一寸八分、祭礼弓唯一の金色、的中まで射続ける
金的だけは射抜かなくてもかすって傷を付けたり、塵払じんばといわれる一度地上に落ちた矢でも的中とされる。矢代振りやだいりにて矢順を決めること。

二番 的寸法、二～三寸の星的を一手射る
的中者は矢代打やだいうちの作法。
二番的中者の褒美の受取作法。

三番 的寸法 五寸八分の星的一手射る
作法等、全て二番と同じ。

位上(射上げ) 的寸法 八寸～一尺五寸の星的を甲矢射る
正午 本置終了
昼食
午後 1 時

『競射』

矢場其々の行い方に従う
午後 3 時

『公文の挨拶』

公文による弓士へのお礼の挨拶の後、全ての行事を終了。

式次第の詳細

『矢代受』

矢代受とは、弓士がお祭り弓に参加するために矢代矢やだいや（御矢代あやだい）を公文に受付のために提出する儀式である。

矢代矢とは、敬称の意味から御矢代とも呼ばれ、其々の弓士が弓の技量、作法において一人前であると師匠から認められた際に授けられる飾り羽根の付いた矢尻のない矢である。また、矢代矢を授けられた者は師匠の代わりが務まるといった意味合いも併せ持つ。籠かごの先にその流派、師匠の名前、弟子本人の名前の書かれた紙片が小さく巻かれているために、この矢代矢が身分証明となり、どのお祭り弓に参加することも可能となる。いわば通行手形兼身分証明書の替わりである。また、師匠（免許継承者）においては名前の紙片が籠かごの中央に巻かれていることで弟子（門人）と区別されている。

籠かごとは、矢の竹で作られた筒の部分で矢幹やがらともいう。近年ジュラルミン等ででき

たものもあるが、矢代矢は美しさといった工芸的な意味から竹で作られる。

弓士はその日引くことになる甲矢、乙矢と矢代矢を馬手に持ち（矢の根を持つこと。神事において、矢尻は無闇に表に出さないようにとされている）、弓手に彥を持ち公文に挨拶する。

正座し矢を揃えて公文に捧げるように差し出し、矢代矢だけを親指にて押し出す。これは「本日、この一手の矢で引かせて頂きます。」という意味合いからする作法である。

公文は三方又は尺二寸～八寸の星的に載せた自分の矢代矢を差し出された矢代矢と同じ向きに添えるように受け取る。

弓士の一般的口上、「本日はご祭礼おめでとうございます。」等々。

御神酒、又は志を公文に献ずる（くれぐれも熨斗袋等に寸志と書かぬよう、注意を促したい。）

彥は挨拶など恭順の意思のある場合は彥紐を彥の控に巻きつけるが、弓を引く必要のある間は、彥紐を彥の控の内側（手首の部分）に丸めて入れておく。戦場などで緊急の際に彥紐が彥に巻きつけられていると紐を解く間、弓を引くのに手間取る。つまり、彥紐を解けたままにしておくことは臨戦態勢であるということの武射系弓術の言い伝えである。

馬手とは右手のことであり、騎上で弓を射る際に右手で馬の手綱を持つことからこのように呼ばれる。同じ様に弓手は左手のことである。

彥とは、弓を引く際に馬手（右手）の親指が弦の圧力で痛まないように保護する為の用具の名称。

その後、先に到着した弓士一同にも正座して挨拶する。

口上「御一党様、本日はよろしくお願ひ致します。」等々。

『公文の挨拶』

行事の始まる前に公文は前年の金的中の奉納額を矢代枕の近くの木立などに荒縄等で縛り置く。

参加する弓士が揃ったところで、公文による弓士への挨拶、その日の行事進行の説明。

近年、参加者全員による御神拝をする矢場もあるが、旧来そのような事は行われていなかった。但し弓士が自身の的中の願をかけるための参拝はしたようである。

『平置』

的寸法 八寸の星的を一手射る

公文に矢代矢を提出した矢順にて矢通しを兼ね甲矢、乙矢の一手

現在、弓道連盟では射位からの的までの距離は15間（27m）と統一されているが、お祭り矢場においては射位からの的までの距離は一様ではない。15間から18間とその距離は様々である。また山間部の神社においては地形的な制約から登り矢場、下り矢場と、矢場

そのものが傾斜地に位置する場合もある。そのため、弓士は平置において、矢場の特殊性を理解することが必要となる。的中が優先されるお祭り弓においてはこの平置が矢通しを兼ねた試し射ちといった性格を持つ。

『前置』

的寸法 五寸八分の星的を一手射る

本置の前の甲矢、乙矢の一手、的中者には公文から褒美が出る。多くの場合、粗品程度の褒美である。因みに豊川稲荷の射会などでは稲荷様の絞りの手拭などである。

公文は一尺二寸程度の星的を三方の代わりにし、その上に褒美を供える。

通常、お祭り弓では神事でありながら三方の代わりに星的を使う。

弓士は弓を置き、^{かけ}彥紐を解くか^{かけ}彥を外し、着物の肩を入れた後に褒美を受け取る。

位^い上^{あげ}的、的寸法 五寸八分～八寸の星的を甲矢射る

位上は甲矢のみを射る、乙矢を射ることはない

的^{あづち}を塚^{あづち}の上方に掛ける事から位上と呼ぶ。

豊川市八幡宮では^{あづち}塚の棟木までの高さは約6メートル、的を掛ける位置は高さ4メートルにも及ぶ程である。

足山田（印西派）では、この最初の『平置』、『前置』を行わず、最初から『本置』

から始める矢場もある。その際、御幣で囲われた金的の掛けられた^{あづち}塚は竹を組んで^{あづち}塚そのものが封印されている。これを「^{かざりまと}飾的」という。このような矢場では本置の行なわれる矢場以外に^{したやば}下矢場と呼ばれる練習用の矢場があり、『本置』の前に練習することができる。しかし、下矢場の多くは小さな^{あづち}塚（1m四方程度）に的が掛けられただけのため、射損なうと矢を雑木や山の下に失くすといった事も起こり、弓士にある程度の技量が要求される。

ちなみに、『本置』の行われる^{ほんやば}本矢場の公文席（主催者席）を、射^い小^こ屋からの的を見たときに右側に置くのを^{おもてくもん}表公文といい日置流雪荷派、その反対の左側に置くのを^{うらくもん}裏公文といい日置流印西派の矢場である。

^{あづち}塚とは、的を掛けて矢を射こむ場所で、砂、土、^{おがくず}大鋸屑などを混ぜた土で作られている。日弓連では一般的に高さ2メートルぐらいで60度ぐらいの傾斜をもたせてある。しかし、お祭り弓の行われる矢場は神社の境内にあり、古くからある^{あづち}塚の多くは将棋の駒形をしている。的は一箇所だけにかけるのがお祭り矢場の基本である。

『本置』

金的 的寸法 一寸八分、祭礼弓唯一の金色、的中まで射続ける

この金的だけは射抜かなくてもかすって傷がついた場合や、^{じんぼ}塵払といわれる一度地上に落ちた矢でも的中とされる。また、一度射止めた金的は二度と射かけてはいけないといわれる。

矢代振りにて矢順を決めること。

的中者は翌年の祭礼にその流派、師匠の名前、的中した日付と本人の名前の書かれた板額(的中額)を奉納し、神社の境内に長く懸けられることになる。

江戸時代初期の奉納額が今でも残されている。

普通は「金的中」又は「金奉鵠中」と奉納額の中央に書き入れる。

しかし、本置の 金的 二番 三番 位上 の全ての的を一本も外さず皆中^{かいちゅう}したものは「金皆中^{きんかいちゅう}」と書き入れる。また、金的 二番 三番 と皆中した者は、最後の位上^{かいちゅう}的の立ちの際に公文の「お中^{あた}り見えました」の口上によって射ることなく的中とされる。

印西派に於いては 金的 三番 (6寸の星的甲矢のみ射る) 位上 (乙矢のみ射る) の皆中をもって金皆中となる。

金皆中は滅多にある事ではないが弓引きの最高の名誉である。

矢代振りとは弓士全員の弓を引く順番を決める為の儀式であり、主催者の裁量権に委ねられているが、公正を期すために執り行われる。

金的は先に中てた者が唯一の的中者となり、その時点で終了する。したがって矢順が先の射手が有利となる。

古来より金の中は授かりものと云われ、100人の射手が順番に射込み、3周りしても中らないこともあれば、先頭の射手の最初の甲矢で的中といったことも起こる。そのため矢順を決める為の矢代振りの儀式は大変重要となる。

浦上栄著「弓道及び弓道史」にも見られるように日弓連の前身である武徳会も初期の頃(明治の初めの頃)まで、矢代を振って矢順(立順)を決めていた。その記述によると、お祭り弓に残る矢代振りとはほぼ同じと思われる。しかし、日弓連に於いて現在は行われていないのが現状である。

古流弓術は明治以後の武徳会やその後の日弓連の「弓道」へと収斂される過程で、一部の例外を除いて消滅してしまった。そのため東三河においても現在、矢代矢を持つ弓士は古流を継ぐ者だけとなった。

また、矢代矢を用いた儀式や作法は伝承通りに行う事によって、様式として洗練されていることや、神事をすみやかに進行させることが理解される。そのため、ここでは出来る限り正確に記す事とする。

(矢代振の詳細)

胴着、袴着用

襷^{かた}を襷紐^{かた}にて縛り袴の腰に下げる。

白扇の柄を袴の腰に差しておく事。

本置きの矢代振りを始める前に、射小屋の左前方に御幣を1本差し、続いて金的を塚^{あづち}に侯串^{ごうくし}を使わず深く埋め込むように掛け、続いてその上方に眉毛を模した杉などの葉のついた小枝を掛ける。更に金的の上方に山形に三本御幣(天、地、人、と言い伝えられる。)を差す。

次に矢取り小屋の前に1本差す。

また、金的は射小屋から見て最も光を放つように掛ける。

矢代枕^{やだいまくら}をはさんで向き合うように蹲踞し、[矢代振の者]及びその「介添」と[御手回しの者]三名にて矢代振りを行い、[公文]は帖台にて控える。この作法は公文（主催者）及びその門人が司る。「介添」は「矢代振の者」の後方に控え、作法の間、矢代矢の取り落としなどの粗相に気をつける。

侯串^{ごうくし}とは、的^{あづち}を塚にとめるための串。通常、木か竹で出来ている。

矢代枕^{やだいまくら}とは、矢代矢を並べるために、矢を持たせかけるための凹のきってある枕木であり、左右の足木で支えられる。

[矢代振の者]

蹲踞し参加者全員の矢代矢を羽が右になるように膝の前に束ねて置く。

一礼の後、最初に射小屋の弓士全員に聞こえるように口上を述べる。

「只今より本置きに御座います。」

オヤーダイ（御矢代のこと、弓士全員に聞こえるように大声で）、オヤーダイ、御矢代の御失念は御座いませんか。

オヤーダイ、オヤーダイ、御矢代の御失念は御座いませんか。

御的ご覧の通り、一鵠射流し^{いっこういなが}、小的^こ的^{まい}壱貫^{あともい}、お後見^{あとみ}合わせに願います。

御^お筥^は奉^{ほう}納^{のう}景^{けい}品^{ひん}的^{てき}で御座います。」

「一鵠射流し」とは、中^{あた}るまで射続けるということである。

「お後見合わせ」とは、何時まで引いても的中^{ちゆう}しなくて行事の進行に支障が出るような場合に途中で公文の裁量^{さいりやう}で三鵠^{さんこう}に変更することができる。

公文の都合で「一鵠射流し」の口上が「甲矢一鵠、乙矢三鵠」の場合もある、その際には甲矢は金的のみの一鵠、乙矢三鵠とは金的の右斜め下に同じ大きさの金的、左斜め下（金的より少し下の位置）に銀的を三角形に隣接して掛ける。どの的に中っても金的の中となる。「一手一鵠、お後見合せ」の口上の場合、一手は一鵠、後は公文の裁量ということである。

「小的^こ的^{てき}壱貫」とは二番的、或いは三番的の甲矢、乙矢の両方を束^{むく}って（続けて）的中した者に、褒美を三倍与えるという意味である。

また「小的^こ的^{てき}壱貫」の口上を矢代振りに入れた場合は「二番」「三番」的の甲矢を的中させた弓士が乙矢の立ちの際に公文は「お大事（オダイジー）、そろそろお大事（オダイジー）」と掛け声を掛ける。つまり「甲矢を的中させたので、乙矢は慎重にひいて是非的中して下さい。」という意味であり、弓士同士が囃して掛け合うものではない。

口上の後、白扇の柄を先にして筆を持つように矢代矢を二本ずつ分けるように数える。

この場合白扇の代わりに矢代振り自身の矢代矢を用いることもある。

数え終わったら弓士全員に聞こえるように^{やかず}矢数を伝える。

口上

「御弓数（おん弓かず）何々弓（きゅう）」

参加する弓士の人数と同数であることを確認する。

^{こま}菰の上に置かれた矢代矢の押取節の辺りを両手で掴み、広げては閉じるように矢を混ぜるように三度羽分けする。

左膝を立て矢の羽根を上にして左太腿に持たせ掛ける。全ての矢代矢を両手で左右から掴み扇を広げる様な動作で三度羽分けする。右膝を立て同じように三度羽分けする。（これは特定の矢代矢を最初に抜き出さないという目的の為にする作法である。）

右膝を立てたまま、矢を右太腿に持たせ束ね右手で下、上、下と羽を撫ぜるように羽揃えし（右手の掌で本^{もと}柄^はから^は筈^{はず}に向けて撫ぜるようにする動作）その手を返し矢の射付節の辺りを掴み袴の腰辺りに背負い左手で押取節の辺りを掴む。

右手で一度矢を平手で打つように拍子を取り、袴の腰辺りに背負った矢代矢のうち任意に一本を引き抜き、目の高さの前方に突き出し握ったまま捧げ持つ、親指と手の平で矢を挟み持ち残りの四指は真っ直ぐ伸ばす。

立ち上がり、前に進み出る。的正面にて立ち止まり、的を一度注視し、再び正面に向き直り御手回しの頭上に矢がくるまで進み、数歩下がり、左膝を付いて蹲踞し矢代枕に矢を置く。（この最初に置かれた矢代矢の持ち主が矢順1番となり、その後順番に矢代枕に並べられた矢代矢の順番が矢順となる。）立ち上がり元の位置にそのまま下がる。その場で蹲踞する。

続いて から までを繰り返し矢代矢を順番に並べてゆく。最初の三本の矢（役弓3名）が並べられた後は総ての矢を矢代枕の前で後退することなく1本ずつ背中から引き抜き順に並べてゆく。

最後の矢は背中から引き抜いた後に膝の前に突き刺すように立て、左手で射付節の辺りを支えた後、右手で上、下、上の順番に羽を撫ぜるように羽揃えした後、手を返し押取節の辺りを下から支え両手で一度捧げた後、静かに矢代枕に置く。

[御手回しの者]

役弓3名の矢代矢が並べられた辺りで「お手廻しをさせていただきます。」の口上の後、最初に並べられた矢（大前）から順に並べられた矢代矢の名前を読み上げる。その際、右手に白扇を持ち、白扇の柄で矢の根を押さえ、左手にて少し矢を持ち上げ読み上げる、読み終えた後、公文が帳面に名前を記入する間、矢の根をその位置に押さえたまま羽を左肩に持たせかけ弓士全員によく矢代矢が見えるようにする。

この作法は御手回しの者が勝手に矢順を前後に変更しないといった意味合いからするものである。

読み上げる際の敬称は以下の通り。

公文は「矢場元、又は御筆元」、公文の門人は敬称なし、免許継承者は「何々先生」、門人は「何々殿」。

本来は役弓に[矢代振の者]自身の矢が出たような場合は、遠慮する意味から矢代枕に並べずに胴着の襟首に差し、そのまま続け、矢代振りの最後に引き抜き矢台枕に置く。矢場によっては矢代振自身の矢代矢は、最初から胴着の襟首に差したまま矢代振りの儀式を行うところもある。(足山田、印西派)

[矢代振の者]

御手回しの者がすべての矢代矢の名前を読み上げた後、「御弓数(おん弓かず)何々弓(きゅう)」と口上を述べて矢代振りを終了する。

[公文]

読み上げられた名前を帳台にて記し、その日の本置の矢順とし各弓士の成績をつける事とする。

全員の矢代矢が読み上げられた後、漏れた弓士のないことを確認する。

公文は大前の射手から矢順に従って弓士の名前を読み上げ、呼ばれた弓士は順番に銚合せをして前弓と後弓の射手の確認をする。

銚合せとは射場の中央で馬手にかけをもち、弓手に弓をもち、執弓の姿勢で射手同士が向き合い、自身の流派、師匠の名前、自分の氏名を名乗った後(流派に属さず、その師範を持たないものは自身の居住地及び氏名を名乗る。)弓の天神を床に突きながら回りこみ、射手全員が順番に前弓と後弓の確認をする作法である。

近年この作法を行う矢場もなくなり、本置の始まる前に自分の後弓の確認のために公文に聞く弓士が多く、公文の帖面を覗くといった無作法な事も起こる。ぜひとも行いたい作法である。

参考までに明治43年に大和流師範 坂勘衛門先生の開催された、大和流師範 日置流師範参集による足助の「金的神事大和流作法書」とも云うべき伝書を以下に記す。

「一、矢申し之事」

「公文所は各射手方の矢順及びその人を知らしむる為に、弓太郎、矢代の姓名を読み上げると共に、矢申しの儀を為す旨を告げる、斯くする時は矢順を呼ぶ必要なく公文所の責任を問われざるものなり、又射手方としては、後弓の者より矢順に関する責を負わする也。

弓太郎大前より姓名を読み始める時、大前の者より弓を左手に伏せて持ち、かけの指の方を後にして右手に持ち、落の口より出でて的の・に進み、弓の末弭を己が正

面より斜右前の所につけ、弓はその俣腰のみ前に進み右に転じて程よき位置にて後の方に向ひ、左の膝をつき右の膝を浮かせて下に座る。

その次の射手より前者同様に前に進み、己が弓は前者の弓の末弭より斜向いの左に伏せて下に座り、姓名を名乗り互に一礼す。

前者は立ちて大前の口に入る。

後者も直ちに立ちて、前者同様の作法を為し、後弓の来りて挨拶するを待つ。以下同様也。此の場合に於て、弓太郎が姓名を読み上げると矢申しの出場者と同一・せざれば往々順序の間違ふ事あり、大いに注意すべき事也。」

大前おおまえから三名の弓士（役弓）は支度して射位の数歩後ろに執弓とりゆみの姿勢で横に並んで跪座きざする。大きな矢場では五人立ちの場合もある。

役弓の射手方は弓手の肌脱ぎを済ませておくこと。なお近年、肌脱ぎした着物の袂を袴紐に止め、袴に仕舞う者もあるが、武射にその必要はない。

大前おおまえとは、多数の射手が順に射るとき、一番先頭で射る射手のこと。

執弓とりゆみとは、弓手で弓弣を握り、弦を外にして、弓を持つ拳を腰にとる。馬手は矢の根を持ち拳は腰にとる。

[矢代振の者]

塚あづちにて御幣を抜く。

御幣を抜く作法

本置きの矢代振りを始める前に、御幣は射小屋の左前方に1本、金的の上方に山形に三本、矢取り小屋の前に1本差しておく。役弓三名が跪座きざしたのを確認した後、射小屋に向かって礼をし、まず金的の上の三本を抜き、矢取り小屋に立てかけ、先の1本を抜き、射小屋に戻り、小屋の左前の1本を抜き、抜いた所に矢取り小屋で抜いた御幣を差す、小屋の左前の御幣は射小屋の右前方に差す。これにより金的に射かける準備が整う。

役弓三名は的に向かい揖ゆうをした後、立ち上がり弓の天神てんじん（末弭うらはず）を床に突き立てながら、前進しつつ回りこむように射位しゃいに就く。

大前は跪座きざし矢を番え立ち上がりそのまま射る。

後弓の射手は立ったまま矢を番え、前弓の射手の筈はず零れなどの不測の事態に備え、射終るまでその場に控える。射終わった者は顔を的の正面に向けたまま上体の向きを的の正面に向きを変え、射位から数歩下がりその場に跪座きざし、後弓が打ち起こすまで矢道に注意を払う。後弓の射手は射位に進み出て射る。射終わったら同じように、次の射手の打ち起こしまで控える。後弓の打ち起こしを見届けた後に控えの席に戻り次の矢順に備える。

このように順番に的中するまで射続けてゆく。

しかし、大前の者だけは射位の斜め前の射手の邪魔にならない位置に跪座し、一手が終了するまで控える。これは矢代送りのためである。

その場を離れる際には公文の許しを得た後、半開き（三折分）の白扇を置くこと。

また大前の者は乙矢の立ちの際には大済みの射手と銚合わせをした後に射位につく。

お祭り矢場では祭礼という性格上、矢道に人や動物などが横切るといったような不測の事態が起こる可能性がある。そのため射終わったものは後弓の者の筈零れや矢道に注意を払う必要がある。また神事である事から、失敗等は重大な粗相と考えられている為でもある。

日弓連の採用する射法では射手が射た後に弓倒しの後、顔を的から背けるが、日置流などの武射系の古流弓術では的正面に顔を向けたまま、上体の向きを的正面に向きを変え数歩下がる。あくまでの的から顔をそむけない。これも金的は鬼の化身であり、的は敵であるといった考え方が底に流れている為である。

金的に的中したら矢取りの者は的の横に進み出て射小屋に向かって深く礼をする。これが的中の合図である。

的中した射手自身と後弓二名の三名はその場で弓矢を置き（弓の上に矢の射付節辺りが交差するように置く）正座し控える。

公文の門人が一尺二寸の星的と半紙を持って的に駆けつける。

左手で的を押さえ右手で手刀を切った後、矢羽を下、上、下、と羽を撫ぜるように羽揃えし、その手を返し上から押取節を摘む。矢の刺さったままの的を塚から取り上げ泥を軽く振り落とした後、半紙で矢の根を包み、半紙と一緒に持参した的を三方の代わりにして、金的を矢が刺さったまま供える。

供えられた金的は公文席に持ち帰り神社の本殿での祝的までそのまま置かれる。

公文は金的の掛替えに二寸八分又は三寸八分の星的を掛ける。これを「星継ぎ」という。金的の的中した弓士は後弓の者にその的で射続けることへの了解をとった後自分の席に戻る。全員の弓士が一巡するまで射て終了する。

揖とは、礼と同じように立った姿勢または座った姿勢で背を丸めずに上体を前に屈し元に戻す動作のこと。この場合的に向かってゆく決心の現れである。

未弭とは、弓の上端の弦の輪をかけるところの名称。

射位とは、矢場における弓を射るために決められた位置のこと。

跪座とは、爪立って座った姿勢のことである。日弓連では右足を半歩引きそのまま腰を落とし膝頭は揃えるが、日置流では左足を引き、膝を割りながら腰を落とし、左膝を床に着け右足は開き気味に浮かす。あくまで日置流では膝を割って跪座する。これは次の動作に移りやすいことを重視する武射系弓術の特徴と思われる。

筈零れとは、行射中、矢が弦からはずれて矢は飛ばずに射手の近くに落ちたり、発射の際に矢が弦から外れたりする事。

打ち起こしとは、弓を引く際に引きやすい位置まで持ち上げる動作である。

矢道とは、射小屋と塚^{あづち}の間の矢が飛ぶ道のこと。

矢代送りとは、大前の射手が連続して先頭の射手になることを避けるための儀式である。一手終了後、又は甲矢中の場合は射小屋へ矢がかえってきた際にこの作法を行うことによって大前の射手は大済みになる。

詳細は次のとおり。

執弓の姿勢で馬手に^{かた}驒を持ち弓手に弓を持つ。矢代枕の右端に進み出る。後退して自分の矢代矢の前で跪座する。^{かた}驒を弓手に持ち替え弓の弦を下から返す。馬手で矢代矢を取り弓手の親指と弓で射付節を挟み、馬手で押取節を下から支える。立ち上がり後退し、大済みの矢代矢の位置に跪座する。右手で矢の羽を下、上、下と撫ぜるように羽揃えした後、その手を返し上から矢を摘む。自分の矢代矢が大済みになるように矢代枕に置く。弓の弦を返し、^{かた}驒を馬手に持ち替え執弓の姿勢をとり立ち上がる。執弓の姿勢のまま矢代枕の端まで後退し^{ゆう}揖をした後、自分の控えの席に戻る。

一手終了する度に大前の射手は矢代送りを繰り返す。

星継ぎ（掛替え）とは、金的的的中した時点で終了する為、その後の者に不公平が生じる。そのため、お祭り弓では全員の甲矢が一巡するまで、または甲矢、乙矢の一手が終了するまで金的に代わる的を掛けて射る。全員の矢が揃ったところで矢取りの者は射小屋に矢を戻す。これを矢揃えという。

二番、的寸法二～三寸、一手を射る

的中者は^{やだいうち}矢代打の作法をする。

金的的の中は弓の技量もさることながら、その日の運（矢順等）にも左右される。しかし、二番的、三番的は射手の中てる技量が試される的である。弓士の多くは一手の甲矢、乙矢のいずれかを的中させたいと的に臨む。また、的中者には金的中に続く褒美が公文から与えられる的である。この矢代打の作法の結果、矢代枕に差し掛けられた矢代矢の向きや置き方がそれぞれ最初に置かれた状態と違うことになる。このことによって公文は的中した弓士を確定する。

的中者による矢代打の作法の詳細

甲矢と乙矢では作法が違うので注意されたい。

甲矢の矢代打の作法

的中した射手は後弓の打ち起こしまで控えた後、斜め前に進み跪座して控える。後弓の射終わった後、執弓の姿勢のまま矢代枕の大前の端に進み、自分の矢代矢まで後退し跪座する。馬手の乙矢を弓手にそのまま差し入れるように持ち替え、弓の弦を下から返し馬手で自分の矢代矢の^{おつとりふし}押取節（羽に近いところ）を掴み取り上げ弓の上に乗せ^の籠中節（矢の中央

のあたり)を弓手の親指と弓弰で挟み持つ、馬手で羽を上、下、上と撫ぜるように羽揃えし、その手を返し矢の下から押取節^{おつとりぶし}を掴み、持ち上げ矢の根を右大腿部に上から押し当て、掴んだまま射付節^{いつけぶし}(矢の先のあたり)に滑らせて掴み直し、そのまま矢代枕の元の位置に上から静かにおく。

馬手で弦を外側に返し、馬手で乙矢の根を掴み引き抜きそのまま執弓の姿勢をとり立ち上がり矢代枕の端まで後退し揖をした後に自分の席に戻る。

乙矢の矢代打の作法

的中した射手は後弓の打ち起こしまで控える間に^{かけ}髷をはずし、馬手で掴み執弓の姿勢をとる。斜め前に進み跪座して控える。後弓の射終わった後、執弓の姿勢のまま矢代枕の大前の端に進み、自分の矢代矢まで後退し跪座する。馬手の^{かけ}髷を弓手に持ち替え、弓の弦を下から返し、馬手で自分の矢代矢の押取節を掴み、取り上げ弓の下へ差し入れ、箆中節を弓手の人差し指と弓弰で挟み持つ、馬手で羽を上、下、上と撫ぜるように羽揃えし、その手を返し矢の下から押取節を掴み持ち上げ、矢の根を右大腿部に上から押し当て、掴んだまま射付節に滑らせて掴み直し、そのまま矢代枕の元の位置に上から静かにおく。

馬手で弦を外側に返し、馬手に^{かけ}髷を持ち替え執弓の姿勢をとり、立ち上がり矢代枕の端まで後退し、揖をした後に自分の席に戻る。

甲矢、乙矢、一手を^{そく}束った射手の矢代打の作法

甲矢、乙矢を連続して的中させた者の矢代打。また、二番或いは三番的の一手を続けて的中することを「貫をとる。」という。

的中した射手は後弓の打ち起こしまで控える間に^{かけ}髷をはずし、馬手で^{かけ}髷を掴み執弓の姿勢をとる。斜め前に進み跪座して控える。後弓の射終わった後、執弓の姿勢のまま矢代枕の大前の端に進み、自分の矢代矢まで後退し跪座する。

馬手の^{かけ}髷を弓手に持ち替え、弓の弦を下から返し馬手で自分の矢代矢の箆中節を掴み取り上げ、矢を返し矢の根を先にして弓の下へ差し入れ、箆中節を弓手の人差し指と弓弰で挟み持つ。馬手で羽を上、下、上と撫ぜるように羽揃えし、その手を返し矢の下から押取節を掴み、持ち上げ矢の根を右大腿部に上から押し当て、掴んだまま矢の根に滑らせて掴み直し、そのまま矢代枕の向こう側に落とし、矢代枕の下から馬手を差し入れ手前に引き寄せ静かに置く。馬手で弦を外側に返し、馬手に^{かけ}髷を持ち替え執弓の姿勢をとり、立ち上がり矢代枕の端まで後退し、揖をした後に自分の席に戻る。

後弓の者は射位にて胴造りの姿勢で、的中者による矢代打の作法が終わるまで待つ。

この作法の結果、甲矢もしくは乙矢の的中者の矢代矢はそれ以外の矢代矢と向きが逆になり、矢の根を手前にして矢代枕に差し掛けられることになる。

また貫をとった者の矢代矢は矢の根を手前にして矢代枕の下に置かれることになる。

公文は全員の一手が終了した後、矢代矢の置かれ方に従い、的中者それぞれの矢代矢の手前に褒美を置き、矢代矢の根を手前に矢代枕と褒美に差し掛ける。

二番、的中者の褒美の受取作法

公文の「褒美をお受取ください。」の言葉の後、矢順の早い者から順番に受け取る。

的中者は馬手に^{かひ}襷を持ち弓手に弓を持ち、執弓の姿勢のまま矢代枕の大前の端に進み、自分の矢代矢まで後退し跪座する。馬手の^{かひ}襷を弓手に持ち替え、弓の弦を下から返す。褒美を1度捧げた後、右脇に置く。馬手で自分の矢代矢の押取節を掴み、取り上げ矢を返し矢の根を先にして弓の上に乗せ篋中節を弓手の親指と弓弣で挟み持つ、そのまま馬手で羽を下、上、下と撫ぜるように羽揃えし、その手を返し矢の上から押取節を掴み持ち上げ、そのまま矢代枕の最初の位置に上から静かにおく。

馬手で弦を外側に返し、^{かひ}襷を馬手に持ち替え褒美を持ち、立ち上がり矢代枕の端まで後退し、揖をした後に自分の席に戻る。

この作法によって褒美を受け取ると同時に、矢代打によって逆向きになった矢代矢が元通りの向きになる。

公文は的中者が漏れなく褒美を受け取ったことを確認する。

三番 的寸法 五寸八分の星的一手を射る

作法等、全て二番と同じ。

公文は的中者が漏れなく褒美を受け取ったことを確認した後、参加者全員の矢代矢を集め公文席に運び置く。

祝的の儀式

金的の的中者は神社の本殿にて神官の御祓いの後、祝的の儀式（矢抜き）を行う。

公文と的中者だけで行う場合と、両者にその介添えが控える場合もある。

その神社によって様々であるが、ここでは的中者の矢抜きの基本的な作法を記す。

神官の御祓いの後、公文と的中者及び介添えの者は神前で向き合うように正座する。

公文は「お手柄でした。」と口上を述べ、三方に供えられた御神酒を酌み交わす。（盃は三度に注ぎ分ける。三方を相手に返す際は右回りに向きを逆にして返すこと。三方の代わりに的中の場合は少し右に回してから返す。）

公文は的（三方の代わり）の上に供えられた矢の刺さったままの金的を的中者の前に置く。

甲矢的中の場合は的中者の右に羽がくる様に置かれる。

左手で金的を抑え、右手で押取節を下から持つ。右手で羽を下、上、下と撫ぜるように羽揃えし、その手を返し射付節を持ち三度に分けて引き抜き、矢尻を引き抜く際に右手の拳で矢尻を掴み表に出さないようにしながら右ふくらはぎの袴の下に差し入れる。金的は着物の袂、又は胴衣の懐にしまう。（神前では矢尻を表に出さない。）

乙矢的中の場合は的中者の左に羽がくる様に置かれる。

左手で金的を下から持ち、右手で押取節を上から摘み羽が右側にくるように矢を返す。
その後は甲矢の場合と同じ。

次に、三方に供えられた褒美を順次受け取る。

神前に於ける他の作法は公文に従う。

的中者は祝的の儀式の後、射小屋に戻り「只今、金の褒美を頂戴いたしました。」等の挨拶をした後、「金のお流れです。」の口上で弓士全員に神社からの御神酒を振舞う。

御神酒を振舞われた弓士は「お手柄でした。」または「おめでとう御座います。」と的中者をねぎらう。

位上 的寸法 八寸～一尺五寸の星的甲矢を射る

位上は塚あづちの上方に的を掛ける。本置に於ける位上的の的寸法は三番的よりも小さくはいけない。本来の的寸法は雪荷派二尺五寸、印西派は三尺三寸の星的であるが、現在では一尺五寸程度の的が最も多く用いられる。

甲矢のみを射る。乙矢を射ることはない。

公文は的中者には「御褒美、お祝い。」、的中しなかった者には「お祝い。」との口上をそれぞれの射手に掛ける。当り外れに関わりなく射終わった者は、褒美を自分の矢代矢と一緒に公文から受け取る。

受け取る作法は前置と同じ。この褒美はいわば参加賞といった意味合いをもつものである。

全員が射終わり、褒美を受け取り祭礼弓は終了する。

『競射』

昼食を挟んで昼から余興としての競射が行われる。

弓の技量による優劣を優先する競射もあるが、多くは絵的などを使い偶然が左右するような娯楽性のある競射が行われる。

競射の結果による公文からの褒美を受け取る。受け取る作法は前置と同じ。

『公文の挨拶』

公文による弓士へのお礼の挨拶の後、全ての行事を終了。

あとがき

古来、東三河は弓の盛んな地域であった。

先の大戦の頃まで豊川市麻生田村では殆どの成人男子が弓を引き、弓を引かない者を探すのが難しいとまで言われた。他の村に於いても日置流の門人は多く、一人の師匠に百人を超える門人がいることも珍しくなかった。

家康の農・工・商にも弓を許す「弓の事」というお墨付の書状に始まる三河の弓は、この地域の広範囲に広がっており、現在も継承されている固有の文化と思われる。

お祭り弓に於いても幕藩体制下の四民参加の大弓道大会といった趣であったことが現在残された文書や奉納額から推測される。

この地域の殆どの矢場には囲炉裏が有り、お祭り弓に於いて公文は馳走で参加した弓士をもてなす。これが、様々な地域の弓士達が囲炉裏を囲んで情報交換や文化交流の場となる。現在でもその伝統は残されている。

古くは矢場に於ける射会は庄屋や名主などによる村政の行政会議の場でもあったそうである。

明治以後、古流弓術は武徳会やその後の日弓連に収斂される過程で一部の例外を除き消滅した。日本の他地域では「弓術」から「弓道」へと変遷するなかで古流は殆んど消えたにも拘らず、東三河に於いて現在も古流が残されている理由にお祭り弓が大きく関わる。

つまり、この地域の祭礼にとって「お祭り弓」は重要な神事であったため、止めたり手を加えたりすることが出来なかったと考えられる。

また、江戸時代から続く免許を絶やすことなく継承する「大儀」が存在したことも一因である。さらに、御神酒が振舞われ、囲炉裏や絵的に象徴されるお祭り弓の持つ娯楽性も古流が継承された理由のひとつに挙げられる。

お祭り弓に参加するなかで言い伝えや伝書を調べるうちに、東三河に継承されている古流弓術の姿が、日本各地に残る流派弓術の伝書を理解する為の示唆に富む貴重な内容を含むことが分ってきた。しかし、その多くは口伝のため文書として残されていない。

ここに記された執り行い方や弓士の作法、心得も調べた限り何処の矢場にも文書として残されていないと思われる。お祭り弓に参加する弓士も高齢化が進み、継承すべきことが失われる可能性があるため、あえてここに文書として残すことにした次第である。

また、本覚書はこの地域で古くから弓を引き、多くの的中額を奉納した経験を持つ日置流雪荷派免許 費 満 先生に内容を校訂して頂いた。

改めてここに感謝し、御礼申し上げます。

平成 18年8月11日

日置流雪荷派 山本良輔

門人 渡邊二郎